

はるふじ わかむらさき  
春富士を 若紫に 染めし朝

あめは ふじ  
今日の雨晴れ 藤に問わしむ

令和五年四月二十四日

日本幻想小説家クラブ会員 大中臣正比呂



福岡城趾 黒田如水 隠居所近くに咲く藤

ありま ふじ  
有馬の湯屋のお藤さんを連れて春の東海道を上り、旅先の旅館で朝食を取る。

ほお  
酒が残った頬を上げ、「今日は晴れるのかなあ」と、虚ろな春を思い遣る。

ひと  
窓外の藤棚を眺める女の姿を、長唄「藤娘」の歌詞を通して想像すれば、

いたこ  
さぞ舞台は面白かろう。舞台は潮来まで続く。